

木曾路名所圖會卷之一

平安 穂里 籬島 編

東山道岐蘇路 俗小中山道と云ふは東海道あり
やよ北陸道あり 其中にあまのく号く

續日本紀云

大寶二年十二月十一日始々吉蘇山の道を開く

和銅六年七月美濃信濃二國の界徑道險阻ありて往還

艱難あり因茲吉蘇路を造る

三代實錄云

元慶三年九月四日辛卯美濃信濃の國縣坂上岑を以て

國の場とせしむ縣坂上岑美濃國惠那郡を信濃國筑摩

郡との間よりあり西國古未境界を相牽する所を變する所

あつた貞觀中勅して左馬權少允從六位上藤原朝臣正能

刑部少孫從七位上兼直繼雄等が遣して西國司と地を

際々相定む正能等舊記を檢く云吉蘇小吉蘇の西村これ

惠那郡繪上郷の地なり和銅六年七月美濃信濃の西國

本書一巻

の場徑路險隘往還甚難を以て吉蘇路を通る七年國二

月美濃守從四位下益朝臣磨本封邑七十戸田六町を賜ふ

少孫正七位下門部連御子大目從八位上山に忌寸兄人各位

階次進む吉蘇路が通るを以て今此地美濃の

國府を去る幸なり程十日信濃國に於てハ家邊近き若

信濃の地やせば何れも美濃の國司たりて遠く關入る彼

道を通ずるや由是正能の定ふ所より從ふ

按ずるふところなり永六百年辛卯日本武尊の東征の時

難日嶺より阿豆麻波夜くや二度款をせしめふと日本紀

に見えり又古事紀に甲斐國に經く科野小野尾に

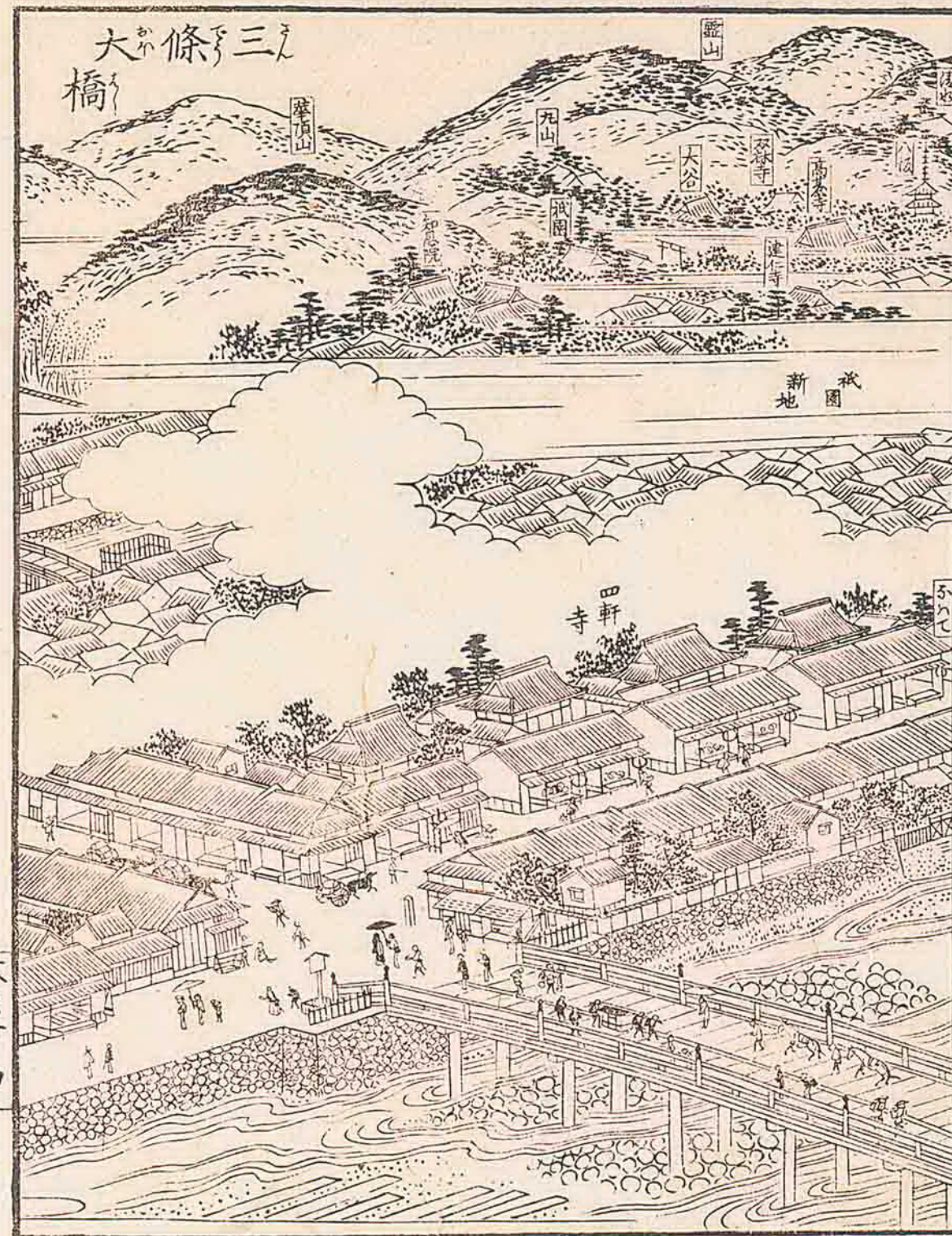
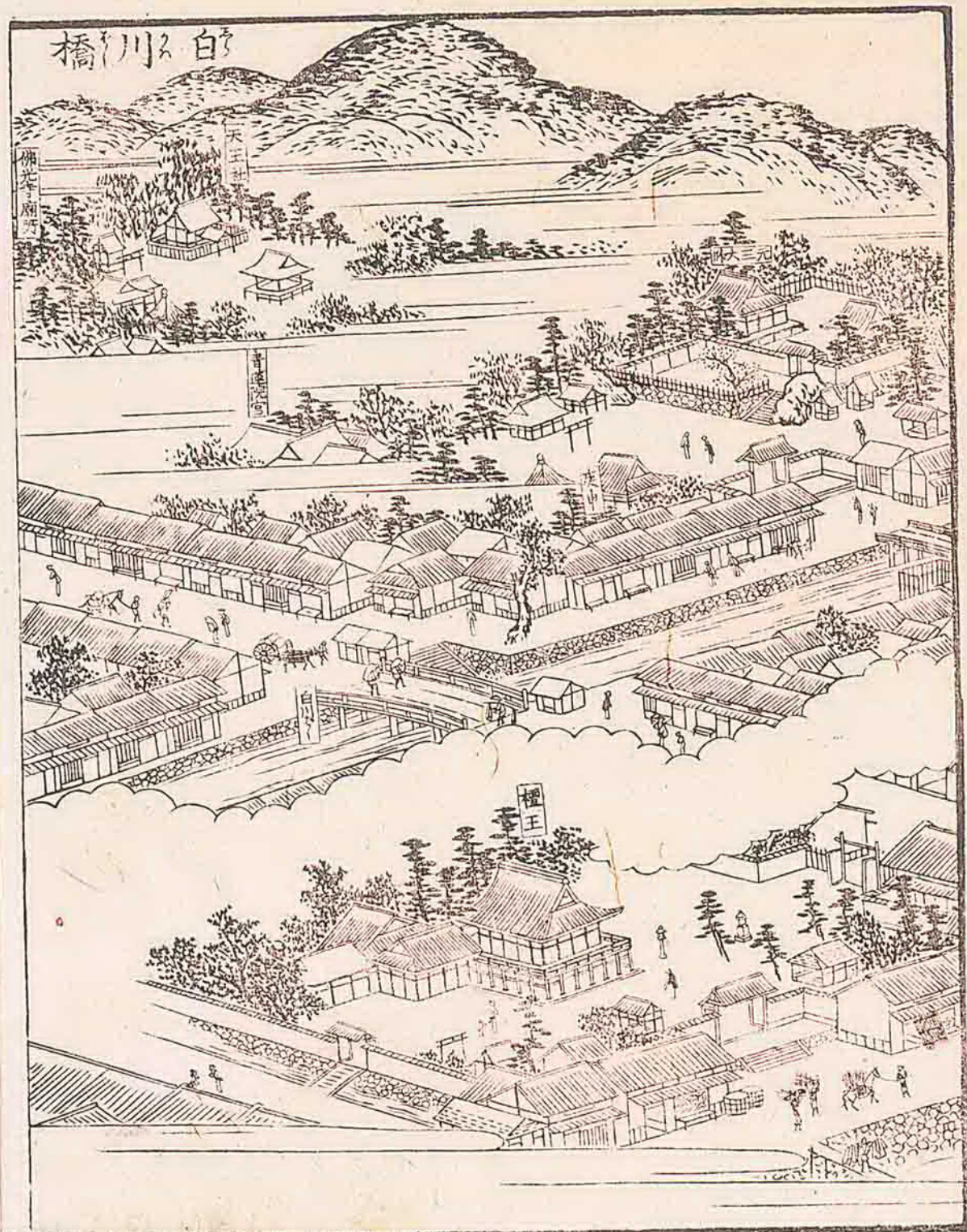
つり給ふと好人吉蘇路を延喜中頃より信濃よりや

和奇集より見たり

拾遺 中くふひはめて信濃なる本為蘇の橋乃抄るや也 源賴光

洛の南風をさへ賀茂の流乃す空風坊の橋れやより知る。河東院地電てふ
 古は執事の席ふ年々々々便々々々や。都の遠近の名いふ病をすさみ
 てまづ都國會ははるる。つづの畿内をめぐりてをたふさるる事なり
 雲乃あはるる河。七年にふあふ。都に東海三國會を
 けむ。さへはるる吉原路をへる。戸ふりり番取麻島筑波山
 城めぐりつけさるる。さへ日芝の御宮はあへ黒敷ふは登ぬ
 其道芝の名を執事をたづひてめぐりり。無下ひさ古稀ふははるる
 繁の霜雪く服をまき。表の機をさるる。ても例の癖やわ通祖神かん
 ち移きにあひて。あへ。京の二のや。此夏卯花月中の六月よりふ
 日ふ旅まね。まづ都の南るれば若菜減道の路より赴んて。さへ
 形く高羽山の道より。秋の中。城たぐり。渋谷の嶺を越く。花ふはあへ
 山科の里城をぬ。さへ。乃農家は搦金屑れてふをひきあけて牛尾
 道の別まふ。さへ。これ城たよさるる。り。小奴車屋は先組を所。是せ

寺のついでに射術の達者あり今小店は紫微成飾ふ北の山にも不安祥
 勢と法親王任職し多右小月其宗檀林あり護國寺といふ諸羽の社
 わりこれと天津児を根令成祀る四宮村十福寺あり奉尊ハ聖親孝
 上宮さふ此神化しやけけよりい仔細物がたりふある仁明帝第四宮
 人康親王の棲居ひ一階宮のなり後小寺せりて真慶法印安
 小任職し多西宮河系袖々盛といふ名ありむくくも海くの物とし
 まける前へ我と又道範て入るふ位しより今これを訛りて道晴也
 云只葉店の異名ともなるれ里そまより追かふゆるあへ京と伏見への別
 道の標をえく裏の方小柳緑花紅の文字紙襦とり
 ひぐい乃色なふ伝家とわく相板の扉うちらぬ乳箱ふ駒うすば
 こち月のほも中うちらたやなれば枯書たちこころわくゆき娘
 の月げ風づるりゆきはどりうれカゝ妻づねと遊子秋残月



ありては函谷の南にありてはひあつてふひつ一蟬丸といひては
蟬丸のりまにけりやの床をむすびくはひと蟬丸をひきて
と命や蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて
蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて
蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて
蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて

いふやうな床なりあつてはひあつてふひつ一蟬丸といひては
蟬丸のりまにけりやの床をむすびくはひと蟬丸をひきて
と命や蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて
蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて
蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて
蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて

近
大津

京師より三千里六町
京師より三千里六町
京師より三千里六町
京師より三千里六町
京師より三千里六町
京師より三千里六町

けりや大津の宮にありてはひあつてふひつ一蟬丸といひては
蟬丸のりまにけりやの床をむすびくはひと蟬丸をひきて
と命や蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて
蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて
蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて
蟬丸をひきて思ひをのりて蟬丸をひきて

護法菩薩神新宮推現慈野社金堂の傍に御井あり天智天
武持統三帝降誕の産湯をいひて指をぬき又け清水といひ
三密灌頂乃關伽々々尊三會の曉成期をいひて一うれ
名泉ありて寒暑小増減あり梵鐘を金堂の前上壇の地ふ在
高五尺五寸四尺五寸厚二寸五分龍頭を足す寸五分天竺祇
園精舍良の方ふつに佛滅後龍宮城ふへが延喜乃頃
儀藤を秀御龍の宮よりこれを傳へてあふ寄附に食堂に釈迦
佛と安んず梅檀の靈木毘首羯摩天の像を楯例より大端あり
口の廣四尺ありて唐院と智證大師の建立寺門系創家初の
所と唐の青龍寺に模して中央より智證大師の像を左ふ英石動
石より大師の御骨護摩堂三層塔新山王祠寶藏より大師像より
將來の寶ありんぐあり十八神祠と南院より燈幢石壇へ金堂
の前よりこれと天智帝遷居八座を謀りて其罪障を悔く

伽藍次第建一眞法供書を授けり所へ終焉より足利吉成公一切
經を授けむ自序の奥書ありて又慶長七年より毛利輝元唐辛の
一切經を寄附せし所教待仙人の入定室と金堂の東北より教待
和尚と神通延來れ仙像ありて二百餘歳にして貞觀元年のま
りめて智證大師より見て南山院附屬に其後石堂へて遷り其
壽二百六十二歳より本朝神仏傳より三井寺教待仙人原滋賀
郡の人より百餘歳を歴りてとも容貌壯年より常は魚池
沢谷より其骨忽然として青白二色の蓮華よりあつて正法寺より
福神石ありて大悲閣をいふ寺に長ありて琵琶湖の八幡殿より
ありて晴天より竹生爲朝妻里より遠く見ゆる立別所より近松寺
尾藏寺磯女寺水鏡寺常立寺より安藝石橋渡女へ八詠橋
のよりありて早尾の所より海に在る寺の西ふにありて山王社一の内
なり龜丘より龜嶺村雲梯夜櫻淨明水二王門小院中院南院

中てあり園墓と智院大降して天皇宗に陰驗道を奉るは天降の
廟堂に比敵山四明嶽あり景行天皇五十八年壬二月近江國志賀
里小都遷りてあり由日幸紀ありて今志賀の郷内西郡村に
は地味清泉あり極く美なり惣て皇居の神神社佛國の古跡
と見え水の美惡より知る今もても賀茂より見れば小岩金
小智辨あり吉田小明星水黒苔は雲々の園山小吉水清水寺に
系清水其外移つた遠ありは浪速あり津城あり黄令水天王
寺小龜山あり移りて古跡あり名水あり志賀山越る赤塚か
登りて小自川より出る賀茂の花園を新在桑とて所なるを一思
主祠もは里小あり貫之祠とて眞寺村あり崇徳廢寺の跡
梵釈廢寺の跡とて定るは智光寺の城蹟は赤塚村の上方
にあり唐橋北岸より移りて海古童神と祀る一松と構のめり五郎孫
言サニ丈枝系あり移りて武百回移りて茶々として霜雪あり

凌ぐ千葉成常とての明照の朝自りける松の系とてにや小岩浦吹
夕ぐれ小松志ね色成ありまは庭ありて松と花あり移りて
と陰一唯母より引あるより人とな後成郷もとみ移り志賀郡と
志賀郡西郡村あり字成御所内とて今竹林の中小岩清泉あり
これ其頃の遺跡と

古事記云

若帶日子天皇天城勢坐近淡海之志賀
高穴穗宮治天下也此天皇娶穗積臣
等之祖建忍山垂根之女名弟財郎女
生御子和訶奴氣王柱一故建内宿祢為
大臣定賜大國小國之國造亦定賜國
國之堺及大縣小縣之縣主也天皇御
年玖拾伍歲御陵在沙紀之多他那美
也



志賀里 （旧名）中津 佐々木あり

新古今

今より志賀の荒原を掃きわたる人共此婦ふ里
神より此の月を結集しむすしやいづる志賀の古里

後政
大政大臣
平上徳忠源

志賀浦 （はがのうみ）

拾遺

はるる志賀の浦風いづるのうらたきしむる

右衛門督
公任

後拾

みよき世あまの海をいづるあまの志賀の浦風

任督之痛
左近中将
良経

千載

極うひれ山風吹きたるあまの志賀の浦風

日

このよみて清く洗ひあせし志賀の浦浪立そよま

新古今

志賀の浦をいづるあまの志賀の浦浪立そよま

家隆
任督之入道
前大政大臣

日

さう波や志賀の浦をいづるあまの志賀の浦浪立そよま

新古今

志賀の浦にみよき浪立そよまの志賀の浦浪立そよま

前大政大臣
家隆

後拾

いづるあまの志賀の浦をいづるあまの志賀の浦浪立そよま

後政
任督之入道
前大政大臣

日

見よめる志賀の浦浪立そよまの志賀の浦浪立そよま

任督之入道
前大政大臣

新古今

志賀の浦乃松吹風のうらたきしむる

後大納言
公任

日

志賀の浦乃松吹風のうらたきしむる

任督之入道
前大政大臣

玉葉

志賀の浦乃松吹風のうらたきしむる

任督之入道
前大政大臣

續後拾

志賀の浦乃松吹風のうらたきしむる

任督之入道
前大政大臣

日

志賀の浦乃松吹風のうらたきしむる

任督之入道
前大政大臣

新千

志賀の浦乃松吹風のうらたきしむる

任督之入道
前大政大臣

日

志賀の浦乃松吹風のうらたきしむる

任督之入道
前大政大臣

新拾

志賀の浦乃松吹風のうらたきしむる

任督之入道
前大政大臣

新後古

志賀の浦乃松吹風のうらたきしむる

任督之入道
前大政大臣

長等山 （大津三井あり）

玉葉

すの浦乃松吹風のうらたきしむる

任督之入道
前大政大臣

新千載

志賀の浦乃松吹風のうらたきしむる

任督之入道
前大政大臣

大津宮と今の大津はさう四宮の社内町の中にあり精大明神と松本

にあり小舟入ある松本葉が廣く舟出て矢橋浦(まき葉の)に
ありこれをふねをたぬる唐崎の松本あり葉津城と見えて風を
まば帆に上る頃更には橋より岸陸地はばま陽村の義仲寺
あり朝日將軍義仲の塚跡跡をたぬるの境あり菊が廣く
今の松本村をたぬる寺記云む一宇多天皇をたぬる寺より幸
し給ふ時淡海の國司大伴の義とて入は淡小の宮をたぬる
給ふ此菊をたぬる清和天皇をたぬるは放し葉が廣く又玉造
の名あり大内裏の清とたぬる地をたぬるを焼畑進しける今に凡
あり膳所領の門を入る城下の町ありこの年多度六万石をたぬ
給ふ城あり御水へ秀て風色にたぬる一町あり八丈龍神宮あり
小泉の寺新垣城より本にたぬる舟にたぬるありてあるは八丈龍神
の社あり中進より膳所領の方凡の漢小陽をたぬる清水寺
若沢にあり田畑の社あり中進より牛頭天王稲荷社あり宮所より

宮八幡宮新羅昭神あり給ふた舞五つありて五ヶのたぬる
給ふ今の膳所より葉津より杜世泊よりと給ふ
後撰 開越て葉津の杜にありは清和天皇より新羅昭神あり
後拾 あり此にたぬるの爲角をたぬるをたぬるのたぬる
新後拾遺 ありたぬるのたぬるのたぬるのたぬるのたぬる
新後拾 ありたぬるのたぬるのたぬるのたぬるのたぬる
新拾 ありたぬるのたぬるのたぬるのたぬるのたぬる
ありたぬるのたぬるのたぬるのたぬるのたぬる

東海此のたぬるのたぬるのたぬるのたぬるのたぬる
舊膳所より地名をたぬるありて山王の第七日の日は五ヶのたぬる
頭をたぬる其家小猿の幕をたぬるのたぬるのたぬる
ありたぬるのたぬるのたぬるのたぬるのたぬる
ありたぬるのたぬるのたぬるのたぬるのたぬる
ありたぬるのたぬるのたぬるのたぬるのたぬる

粟比飯の神位を四十九膳調(例系の日音楽成)と奏し神位成
唐海の仲より侍古創其古元文天福元年四月日何り石六膳穀
公より渡りて我今も山門の古創も廢して御膳所の所より
の者(小終)の和穂を受く神位料とする

田畑の所より陽を清水ありこれを吾孫君の祠より膳所の町
の溪より山王系の日より寺食成位とする膳膳所を
即け地より人より鮮菓を日次不貢せし由古より痛むるを也

又本

吹つけにせしはふれを寒くも日次の侍將せざる也

横人より

國分寺の古跡も今の別保の業師佛より

幻燈席の業津系(の南)芭蕉海の遺跡よりふこせ(海軍)より

江の自管より澤より江石折るありといひ侍り吾孫成

江の遺跡よりふこせの江より幻燈席の紀より鴨長明方

丈記よりて書よりいけ席の古跡より近八幡宮の隣地よりて

今を存せり素勝の創

海びのむ椎の本も何り夏本立

龜平境と粟津あり通入ふ事三町并あり

鳥井川より海神社あり大友皇子を祀り

是よりよだ栗より石山寺より入赴く岩谷を過く東寺テ寄

より石山寺の教より門より入は教より藤原行雄の弟より背面

小仁治元年十月十三日從三位藤原朝臣行能書之より平

尊二臂如意輪觀音と長六寸聖徳太子此清化これを腰内ふりて

良辨傳ふ六の像成也せり今の本寺あり之昭土より執金剛

神石金剛王二十八粒衆不勅明王内陣は安し五佛

舍利弘法大師利安名号あり八葉巖より幸その所より源

氏間よりむり寛弘の頃此系式此寺より多就せられ源氏物語

書より所より硯石より源氏間の靈室より式此の所より是より

源氏物語を書かんとす新牛と纏の離れあり海二ツありて濃
 淡のちありや大般若經あり武部が自筆二十八部社を當山
 の落字なり法華の十羅刹女千手の二十八部衆は佛くは川が
 築式部塔二層塔あり建之の頃新郷の建立より今に至る
 大日如來四隅の柱より二十七尊の画像あり丹青妙處なる相輪
 藝政子尾墓經卷と孝謙帝勅と一切經を寫す先く是れ
 清の親見亭へ本堂の東よりあり又新時亭より湖上の舟
 あつた勢田橋の引人眼下にありて清曉なる亭より橋樑の中
 煙の地ふありは鐘と鼓とありありや石山にあり清教寺を
 中央弘法大師左小良辨僧心在十内供清祐塔寺八祖の画像
 あつた八重松と清教寺の西よりあり岡山良辨南都よりくる裁
 後より古樹と枯く植経之新殿石比良の神より小良辨はま
 たりありありと世田河の雲と石階のよりあり食堂と下煙の地ふ

あり聖儒文殊武安に比良の神新向と食堂の南よりあり清
 持現と當山の落字と新井持現の別社より羅伽井と下煙の地ふ
 あり水源と本堂の下れより清教寺の此下流をあらう川より天狗
 杉の山の入りあり柳が湯と永曆の法本堂圓祿の頃新井の奥
 飛出と出流の柳乃枝小浦よりあり新井のより新井の奥
 三所清ありありよりありは靈岨ありて寂寥なる所より実小庵
 外の仏境よりありは靈岨ありて寂寥なる所より実小庵
 清教寺よりありは靈岨ありて寂寥なる所より実小庵
 石よりありは靈岨ありて寂寥なる所より実小庵
 一室ありて和室を教ありけりや義平墓と就穴より二間
 清奥ありけりや義平墓と就穴より二間
 六波羅よりけりや義平墓と就穴より二間
 小庵を築くよりけりや義平墓と就穴より二間

鶴ヶヶと我々所履園と南山の麓に下宿をせしむるに
昇天し給ふと云ふ所由山と天智寺に在る大律師の言ふに
慶雲の佳瑞をその山に耶蘇とありてありしに
らに其後聖武天皇良辨僧を召し召し八葉の歳上小僧を
言万代の宝祚を護り勅教を授け給ふなり

石山紀行

楠名院公條公 西三條

去年の秋乃に源氏物語れ事などあれは物づらして八月
十日石山寺に在りて武部が弟にたてて昔の事或は
やて既小ありしより像工は其の先の名跡をよきこと
十五首乃奇はさういふ事なりてさういふに
ゆり此事を金店きりて先にはきくはるは是給ある
よりありおまきしよりいふ事おまきして遠座よりいふ

ゆりて續申一部の功にげむりてさういふ又宗稗法師
紹巴法師もまた同職の事なりて其のゆりてに月を
とらんと云ふなり其の源氏の同族ありて十百韻に連
成とやせしは不堪れ人老懷いふに其の驥の尾に
津くづきありてさういふは其の堅くありておまき
目録とてやて表葉の歳なりてゆりてさういふなり
故にひめがし十れ歳なりてさういふなり天文廿四年八月十
四日にありしより書をさるるに其の年をみたりこれに
はるる粟田山と云ふところなるにぬもたれと云ふは
開成と云ふところなるにぬもたれと云ふは
其の南寺といひてこれにありてさういふなり
てゆりてさういふなり其の事も形なりてさういふなり
ゆりてさういふなり其の事も形なりてさういふなり

かの源氏の同て是をまゐりてありて坊を尋ねるに世尊度
 とて志すは東坊志人ありてとていふはうやて見せしむる
 あたりふたれしとていふはうやて見せしむる
 いふて又尋ひありてに舎の坊よりいふ月のかげを
 せしむるれをいふはうやて見せしむる
 ち相人よりいふとていふはうやて見せしむる
 島の名よりいふはうやて見せしむる
 坊のいふ水よりいふはうやて見せしむる
 又一体若原江に一覽と題し書跡もいふはうやて見せしむる
 系乃るびとて後芳芝園標政の月をいふはうやて見せしむる
 一連奇れ舎序も此坊とせしむるはうやて見せしむる
 あは四美備ふはうやて見せしむる
 形の舎序け頃風とていふはうやて見せしむる

あれとて四人のいふはうやて見せしむる
 月を送るはうやて見せしむる
 ある時とていふはうやて見せしむる
 ようけはうやて見せしむる
 即ち仍系とていふはうやて見せしむる
 ての月のちうた年とていふはうやて見せしむる
 そひはうやて見せしむる
 世尊院より百韻の連界ありて廿日舟にて還向し侍を無遊と
 小はうやて見せしむる
 して半ちりれとていふはうやて見せしむる

蘇十六首和歌
 南無如意輪觀世音菩薩とていふはうやて見せしむる



かひもあらまの被ふうして一糸のこゝろ梅乃と伴風
 ひつゝふのやあられおぼふもそのにれたる候もわ
 くにやちのちきけもあつたふのうたゑもや涙も人
 ぬれをはれよるゝておののちいとはいはれぬ中
 いふ移る月あゝとまの輝のそふすゝあゝおぼれむろ
 更きむとと涙を乾れあゝもにゝ一月のうけのうたゑと
 むゝ雪れゝまの月のあひもたようちまれかゝるを
 こゝまの月れゝあゝお鏡ひたてをゝかやとさきや
 とねうゝゝかゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 せうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 せうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 むゝ苦のあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

梅乃あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世あを事候ゝゝ金后馴きあり

長来もあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 むゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 むの海やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 右のやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 世あを事候ゝゝ金后馴きあり

川小道志さりあふ今の中にももれもえんをきかに
はさてめらして結んでね年終るあふやうふたたびの病く
えうくせわたりてのぼるよあふねえれえけよとてる城
見てはさういふれよあふ山の名を替ひてし水之れ人あれね
あが佛をおもなさんと世乃前こゆふ世のちえり
秀頼公は御母堂乃この世後の世は御母のいふはさる
水見ててあふしきさうなるあふむつて替はる月のみね
のひかりあふるをいふたふしうなるふのれあふ
海とみれたさこのも橋も目のまこみこれあふるた
ひとさたあふ舟とばかりすれやあふいふふたじ
のうー舟にやあふいふきあふ南にふすもあふま
ふさうーれあふはあふのうさふさふさうせうふさひ
こづのあふーすはあふれふふふふふふふふふふふ

の物語もあふりげよりあふひとて書さふりけあふては
はさささの中にもあふもすさる人ふもるればるをさる
さういふさういふむてさるさういふのうのふの長能が
峯にさるさる林の夜乃月夜あふさるの峯れ事にはさ
いの世よりいふのあふさういふさういふさういふさう
はささる人さるれさうさうさうさうさうさうさうさう
あふれいふさうさうさうさうさうさうさうさうさう
人さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
とて武蔵さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
すわさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あふさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

しきりておぼしきものなりてけし

石山即事

長頭丸

秋風識我石山行。今日吹晴湖水平。比叡峯高懷寺古。勢多橋聳見虹橫。

石山紀行

澤菴和尚

有故人從故國來。十年不話亦親哉。洛中相伴尋佳境。關外勝遊自是催。坐出紫園向洛東。第三橋水更無窮。栗田口外數村末。逢坂留名關古宮。蟬丸曾引琵琶殘。澗水松風五月寒。關寺跡荒留礎石。小町今已淚攔干。太陽停午太津津。此處即是打出濱。風收雨細水無浪。萬境清湖一色新。

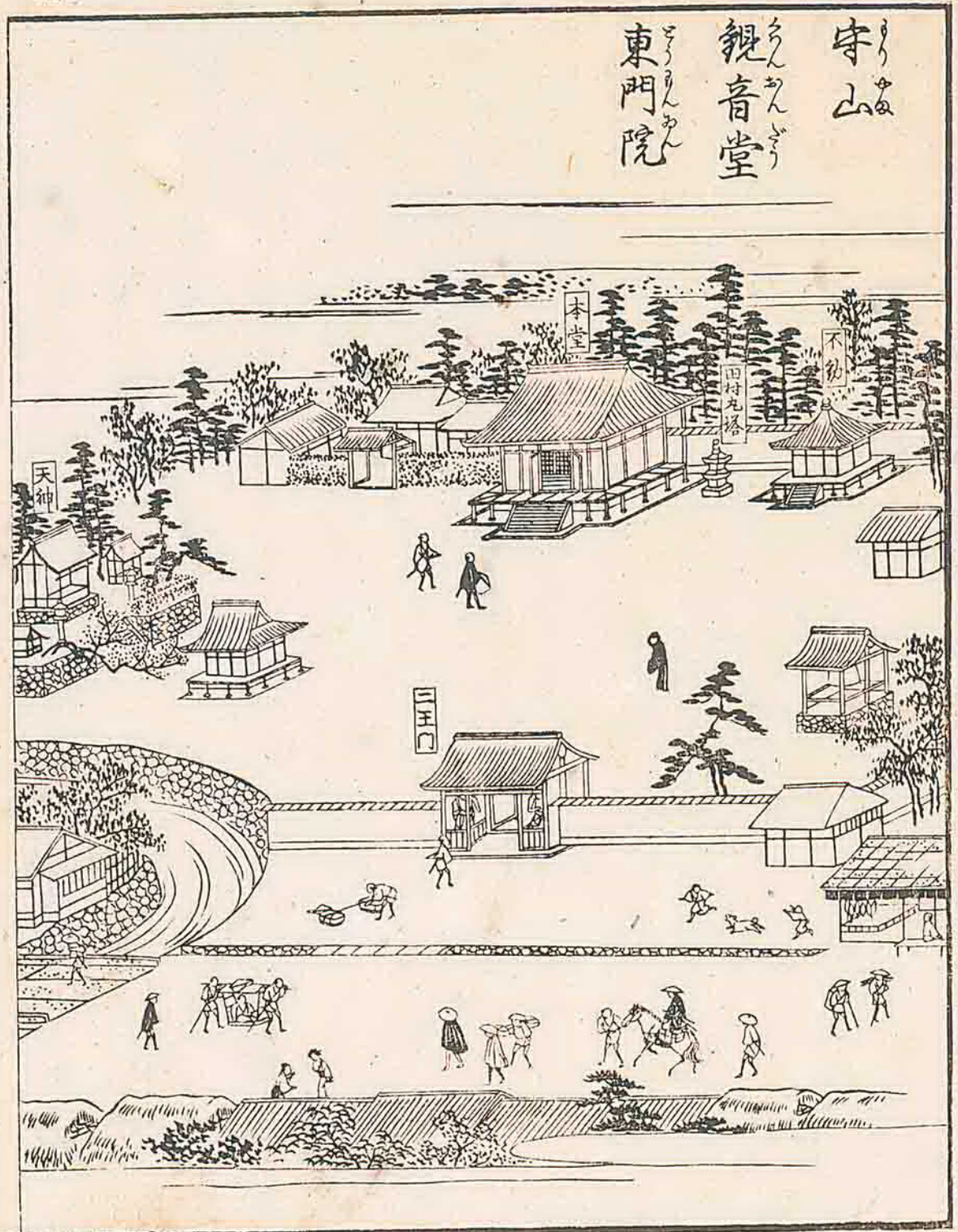
大江之南淡津森。常聞悲風怒濤音。吊古戰場思舊記。兼平寂後猶若今。渡景山田矢走舟。長橋卧浪勢多流。遙遠村路有層塔。此夕借房投宿留。

此處即是石山也。本尊者二臂觀音也。見此山致境。漫々湖水在前。洗肉眼。峨々岩石在後。轉塵心。溪水說法。山風談空。可謂上求菩提下化衆生矣。往古者湖水窮而無下流。故今之觀音堂者古湖水汀也。怒濤顯山骨。如大洋海岸勢。奇石怪巖難盡詞。船繫岩釣磯。于今儼然寺僧詰之。鐘聲頻催暮歸。宿房吉祥院同宿者如玄南都玄齋兩翁也。院主茶菓點侍叮嚀也。山之

緣起靈寶無所殘披閱夜將過初更五月八日之在
 半天微雲遮之雖然菩薩之慈月明々物外而照破
 群昏誠不瞻仰之卒賦小偈
 歸命石山觀世音補陀剎界別何尋縱然天上被雲
 覆菩薩清涼慈月陰

○
 翌朝又伴院主入堂開紫式部閑居源氏間則上
 間掛式部之遺像本堂雖近年再興源氏間者古
 楹猶存以是為證云云聞說式部上此山則源氏
 六十帖浮漫々湖水上矣此證實不虛院主師弟
 携酒數刻有興玄齋法樂之音曲一聲皆人歌聽
 雖興未盡各下山又向舊路歸矣越不可無小詩
 叨信口云

守山
 親音堂
 東門院



光源氏物語始斯山式部遺名満世間渡夢浮橋
縦歸去一輪明月照湖閑

下略

西三條公條卿園陀磨次菴和尚の古た文をみて中の道小海
あり痛業作をねむるを公條卿の意孫國分寺にへく金樓園雅
の風鑑城抄のてしとの清水経塚とてせむ勢多橋の所小橋長
二十二間大橋長九十六間高欄葱宝珠結と造智毎ふ其年号と
橋と一名青柳橋勢田長橋ありの橋ももて終るなり
より秀郷祠竜神祠と東橋凡あり雲徑寺これ成守の回上
不動寺と回上川の水源高峯にありを神と号し地を成り
新形を築る後頼朝の意に回上よりあり後丸をまが奥の
方曾末にあり勢田の町長一葉店藏舎あり建教明神の所なり
衆神大已貴命なり例衆と四月中平日は地の生去神と云

先行紀行

あけぼのやにありて勢田乃がけうもつてんやと有
こづみけりありあまれめの満勢少孫が比敵ふて
その跡をのぞみてよ久王の孝母の山とて
こまけりやねりおれ白波はとてなりて
ぼりー

屋の屋すひて勢田の町とて此所の名を屋と頼朝はひに
ありうるなり勢田とて奥の山流めて流るなり味地郷小橋とて
よく歌をゆり短きなり堀も亦ありて味ひなりこれより三間葉
屋砂川のやれ系なりとて大に村ありて大に葉新田とて越え六右の
方又月橋の池ありとて濁り池辨天池月橋新田大に葉系
とて南に村あり野路の篠原にありとて玉川の池ありこれより玉
川の其一なり

新後拾
とて麻のきむむ森小秋とて月も通る野路乃玉川

[illegible]

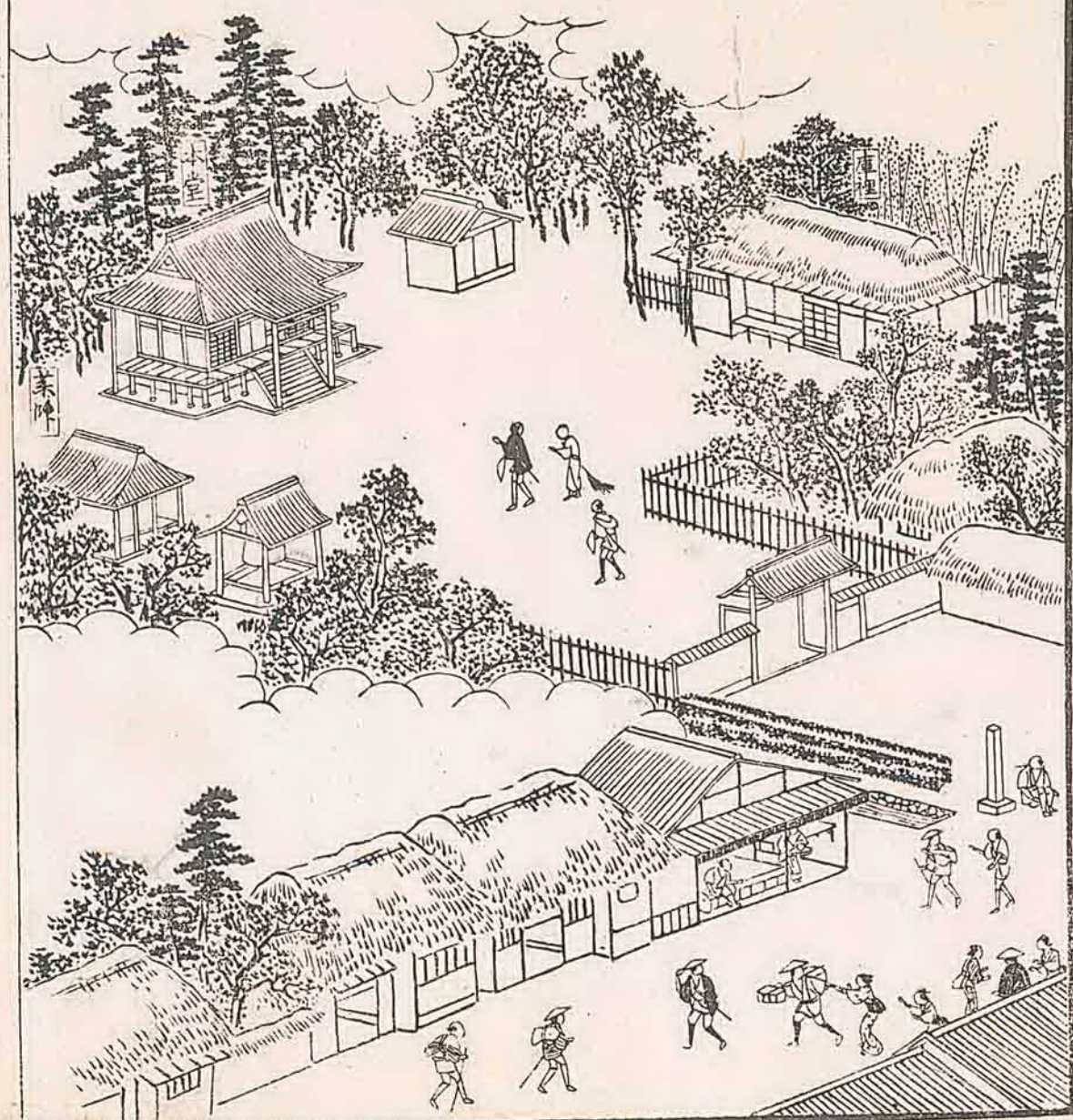
哲人をも含み果と判りありあれのとはさる冊位の藤系

野路の條原城をとりふたは新宮御社の中洛十福も川矣念の
町ふるさうむおもやとて名物河ちゆき人々之にさうま
よれけり端より矢橋のついで中ぞ廿五所矢走小鞭寄八棲宮

卷之九

守山

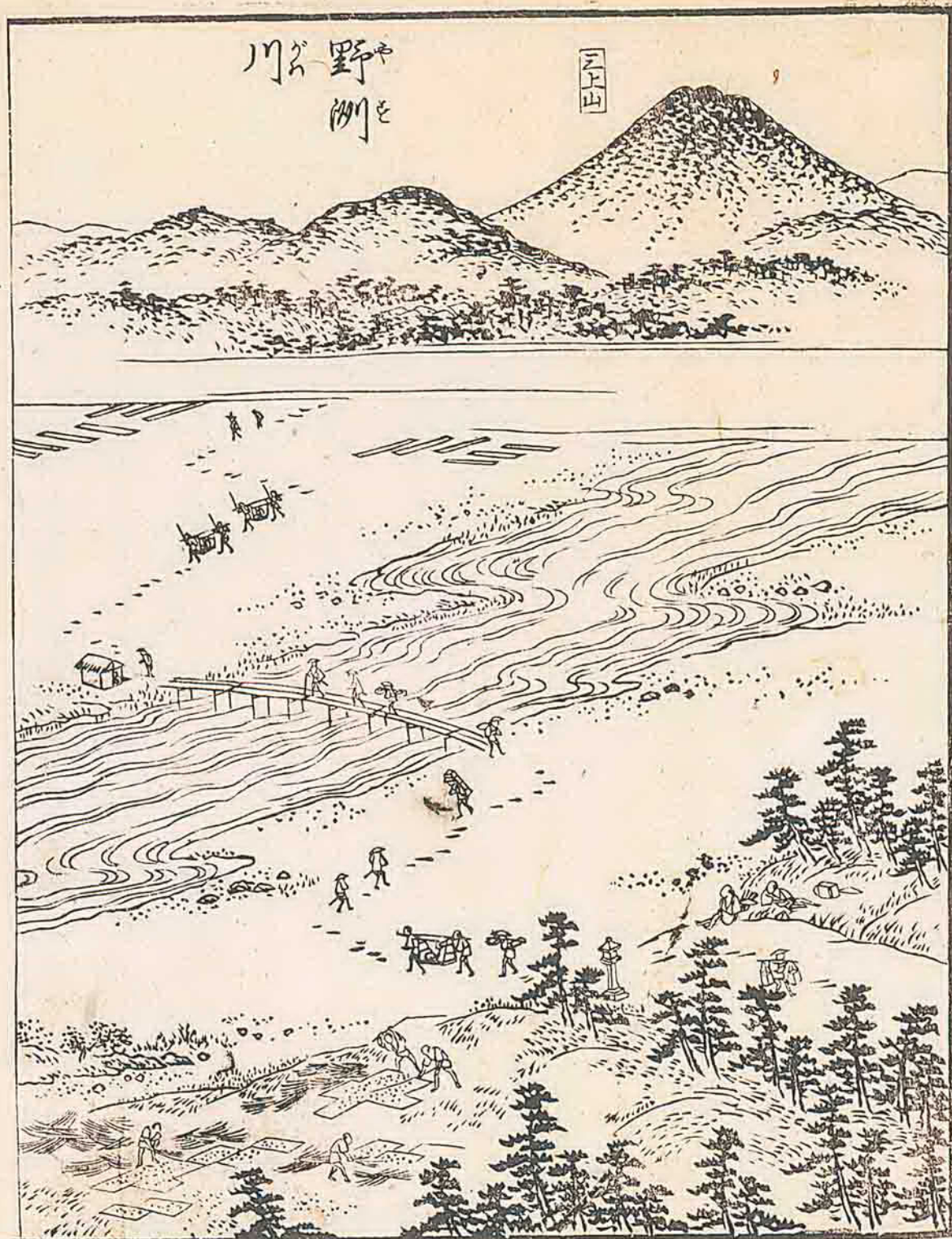
檣觀音



中々一海あり海あり系神と應神天皇たし神功皇后たし
 武内大臣天武帝の御宇白鳳四年二月十一日大中大津宮勅を
 うけてあに勅給しなす其後建久元年右大將頼朝卿上洛の
 時馬より一報をあげくらの海ありと尋ねし人報え
 の名ありは村社檀再興なるをうけり及み矢倉に、鞭状多く
 賣りしを

近江
 草津

守山まで一里半は東海道本曾路街道尾張道等侯
 になしたる一宿中小立本宿神の海あり上呂寺駒升氏
 が活人石等ありありと見えし
 東仙道東海道別は宿端れふ石標あり右一曲は東海道石
 部之駅ふち直道と東山道本曾路より分れて東海道
 名所図会ふちとせしむれば関貝原氏の本曾路之記ふち
 のと補遺してふちとせしむ



野
 河

草津川 常より橋あり森あり出水あり歩むに便し此若き

修に水源を金勝谷よりかゝる末に山田より清水に入

系津の狭野井が泉湧いて暖かき湯井村の川に注ぐ

是齋が山あり和中散を奉りて山田村を過て徳村に社有

大寶天王社 祭神 素盞烏尊大寶年中夜時より時より降臨

し多し穀向の松ありけき谷に二十餘村の生主神と伝説あり四月

十二日生土子れ中五ヶ村より頭を傳へ神ありて頭敷高居の

額大寶天王宮本社南向側小若宮十餘村洞澤橋本社三石を

供物と所むりて同魔堂村は同魔の像あり小若宮の所を

し今宿村小若宮の橋よりありてこれより桑名郡野洲郡の境に

武佐より三里半南宿の入口に守山川あり橋あり称名

寺といふ所が額寺末のちより蓮如上人建立之金ヶ森より

け所は橋よりなるより守山古刹と傳へ



古今

志々森寺の所をいへり守山系山は色澤深き 貫之

嘉應元年高倉院寺附大尊會悠記方の 神ありての寺近に國守山とよみあり

千載 皇代より系代の神ありて守山といふ名をこま 宮内省永範

新古今 志々森寺といへり守山の山にけし山よりせり 式部大輔

續古 今頃八月に我よりて守山系山は本町の風 春後雅純

玉系 守山系山を数々わけりて色澤のきききき 貫之

新後拾 人めを山下より清水の所を流るる者流とせり 漢人志氏

史本 形く輝の派ありて守山の山にけし山よりせり 為相

守山親音堂と歌中にありて天台宗よりて東門院守山寺と号に

本尊 十一面観音 西條城安に延鎮の化

桓武天皇勅ありて田村將軍に建立之南山親と古よりて

奉堂の側小田村塔不動堂ありて塔より天満宮勅ありて惣門あり

二王城安一傳小鈴鐘堂あり

帆柱観音と日歌中にあつた天香宗ありて慈眼寺と辨に

本尊ハ十一面観音長式尺許あり傳教大師入唐一帰朝の時

送風帆を翫し忽帆柱折れり後々之所十一面観音念

ト紐風縁ある事と新整し移す速く風波揺るなりて帰朝

師く乃ち因茲其帆柱をりて之の像と似せり小安一か

野洲川陳海通撰田川の市をさし一なる若多一に至る句

新勅 書る歌みこれけと目ふひていぬるるぬすの河波

玉乗 旅人みふ花元ふあささくはうちけりた中より川旁

新拾 わる意とめさつたわあささるるるるるるるるるる

母林 早苗とゆきあはれさあはれさあはれさあはれさあはれ

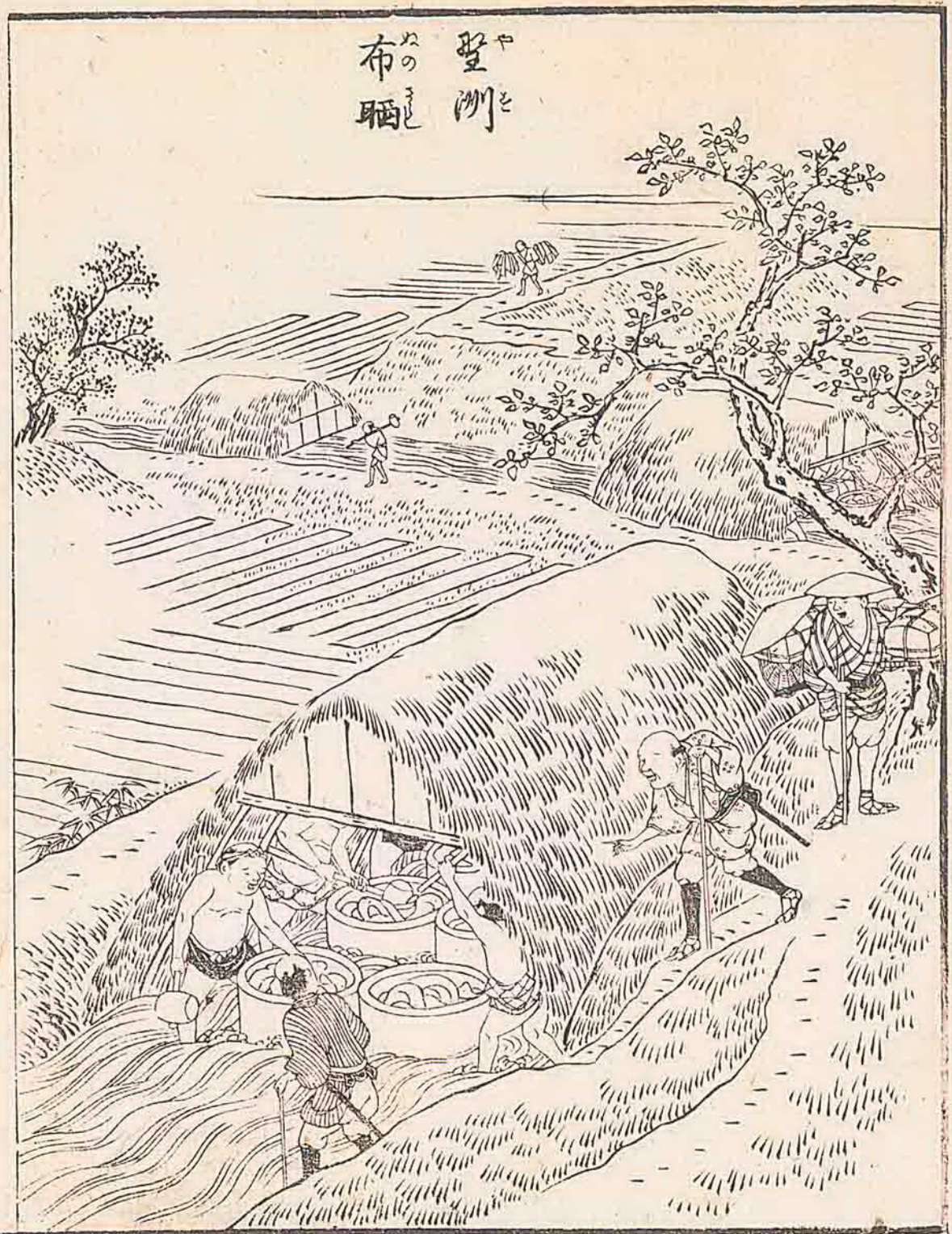
海通記 田中くもて氏老おほけくはれり農夫とてあはれり

くもて氏老おほけくはれり農夫とてあはれり

くもて氏老おほけくはれり農夫とてあはれり

くもて氏老おほけくはれり農夫とてあはれり

聖洲
布晒



楊子風たちと響のこえ毛うちるびと折の編戸れ垣根ふ
おれ花咲すすし山時鳥志のひらくやうて三との嶽と眺
て登例川をうたれ

いふ引すむやん川の水うんよやうてうたうきやめれ

御上神社

延喜式内名神太月以新葺地名三上村と書に

祭神 天児屋根命

左若宮天照太神和魂をまつ
右十禪天瓊々杵尊を祀く

末社竈殿樓門あり當社と大むり孝靈天皇六年六月十

八日狹路例祭と四月二申日若宮の神事と九月十四日三上村

の生土神とて神式嚴重なり神社乃林園廣くして森然と

鈴の音ハ頻く々々現利生の垂跡もきこえぬとて一公毎毎

謹敬ふりら茲傾まげらるる吾應なり人々殊勝の文居

を思われらる

三上山

一名松山ともいふ神社の上あり登路十八町より五十町
後小松山ともいふ郷の由縁よりいかりりたる絶嶺

拾遺

小八龍王の祠あり毎歲六月十八日終王祭とて遠近來て登山
千手観三上の山に排をたさく人々ははる万代とてふ

日

兼代を三上代ふりくく其やまの河水すそあひる

千載

こゝろなる三上の山に排むや八百万代のさうり

後拾

雲霞さみうみの秋風ふけ波きくつふ月うけ

新後撰

玉接うね色をちとてみるのふぞとれはるき

日

はる本と山三上の山に排むや八百万代のさうり

玉系

志如きの浦や時を渡る浮雲ふ三上の山に排むや八百万代のさうり

三上山

三上山にそく山をけしひ小篠原とて中へゆく顧みれば比叡の

山

山三上の峯にそく富士の峰ふけり三上坂を越え砂川ありおの

方

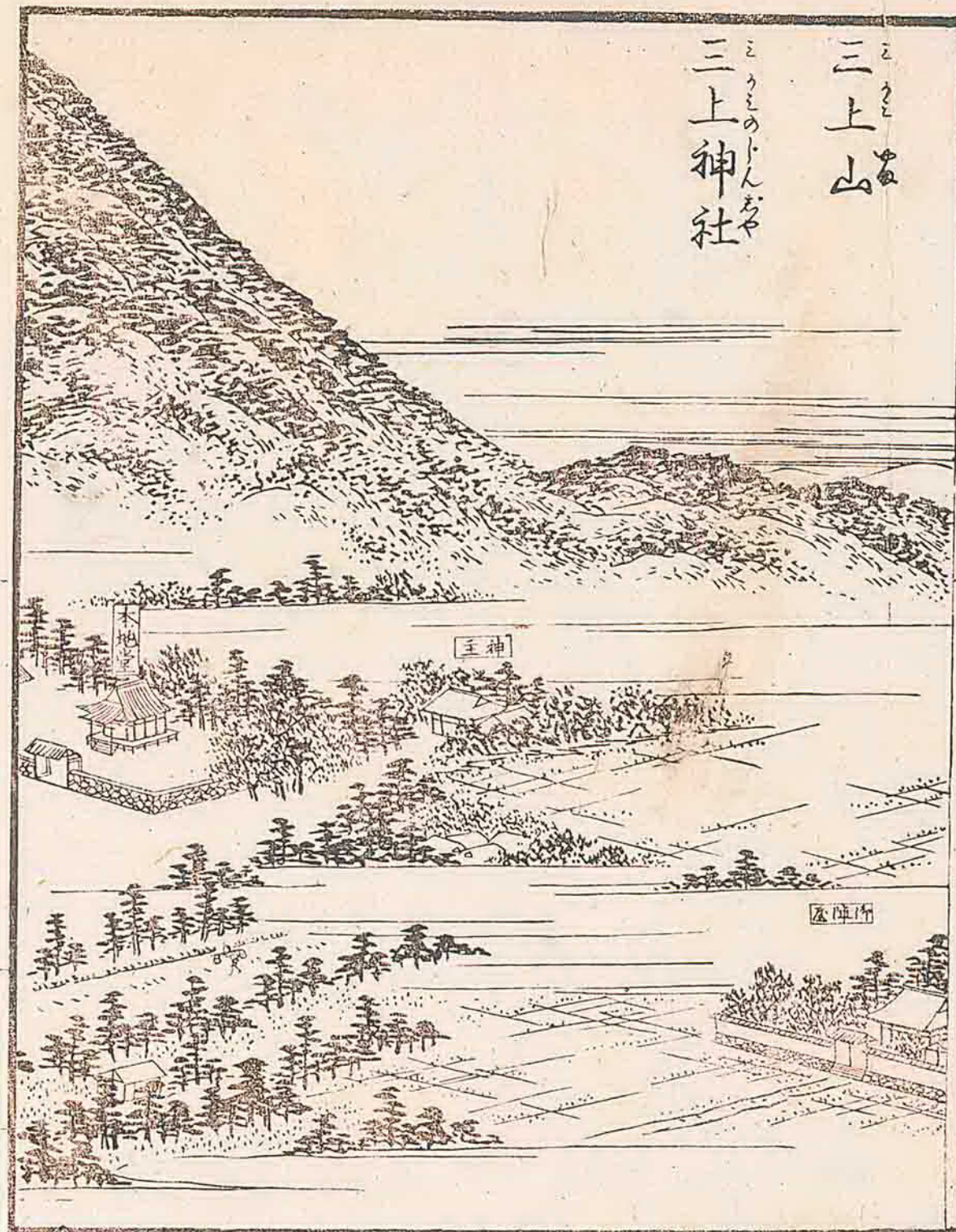
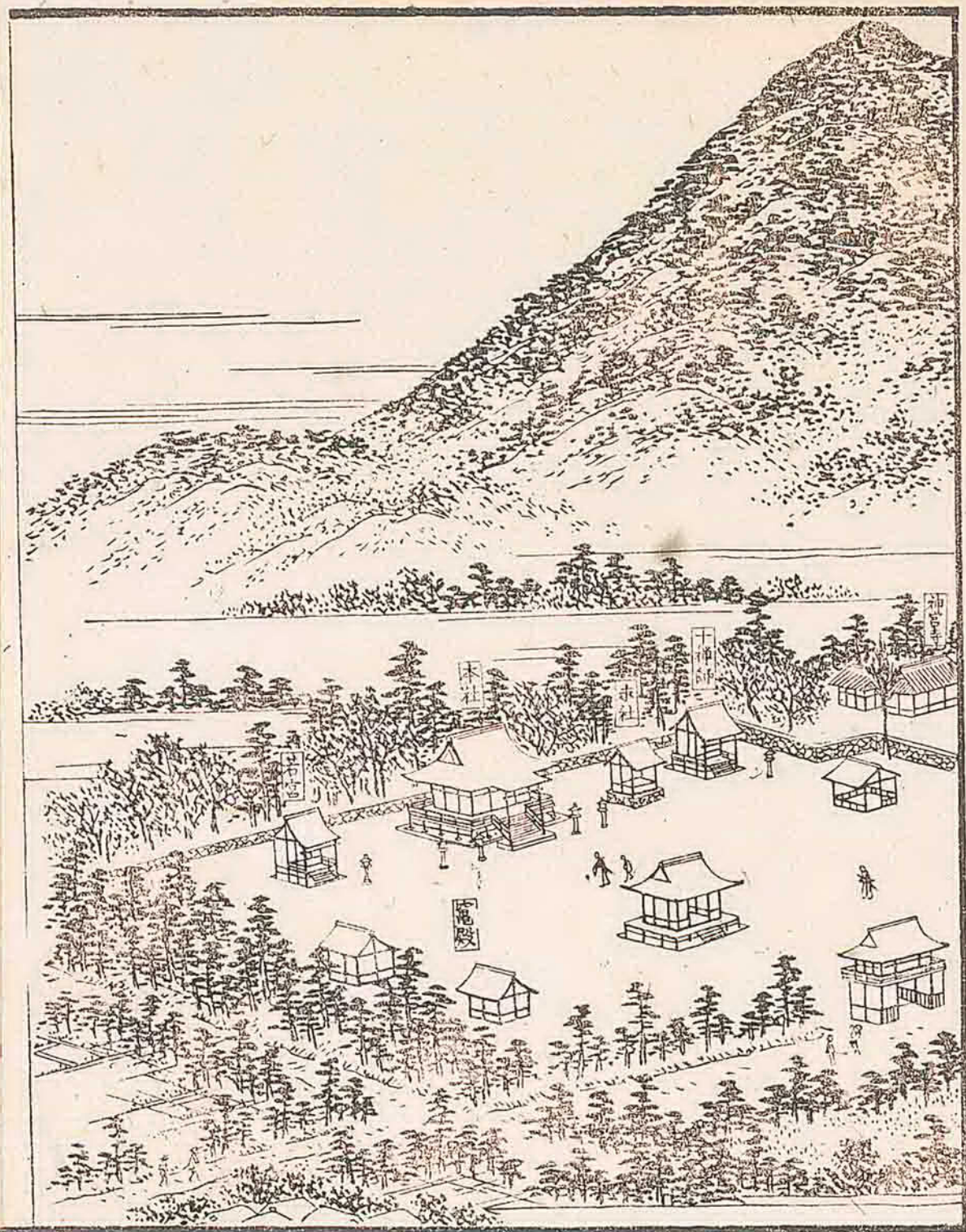
方ふりうさねとて傘は似る古ねありそれより櫻もさぬ辻角

む

むく依るそく矢棟川あり矢のむく村に大うらの金取地とて

小堤

小堤とてしる篠原堤とて篠原に生る神あり又橋の名あり



三上山
三上神社

主神

本殿

藤原社 藤原村より北の生主神と云

白河七首

新古今

これなるものゝ系吹風ふたり人の神めふも
世中うたう一や志の系や核やあれをも愛せ

為家 後成

後古

長きふか風を志れ系や志る世ふ宿りし

後成

平宗盛塚

藤原村の海邊の塚より宗盛の八幡の合戦の
塚に藤原の系を引き加腹を勅免せしものも

鞋不鳴地

海村より此を宗盛首洗地といひ世に傳へ
る名は

通ふくみ

鏡山

街道の右より城人の祝の天日槍と云ふ者日の鏡を
取りし名付初

古今

鏡山いざよりて足さゆえんや

大付玉

月

あまのや鏡の山をさるれば

全

後振

鏡山や海にさるるを

素性法師

拾遺

花の海と云ふや

坂上是則

本巻二九八

大藤原

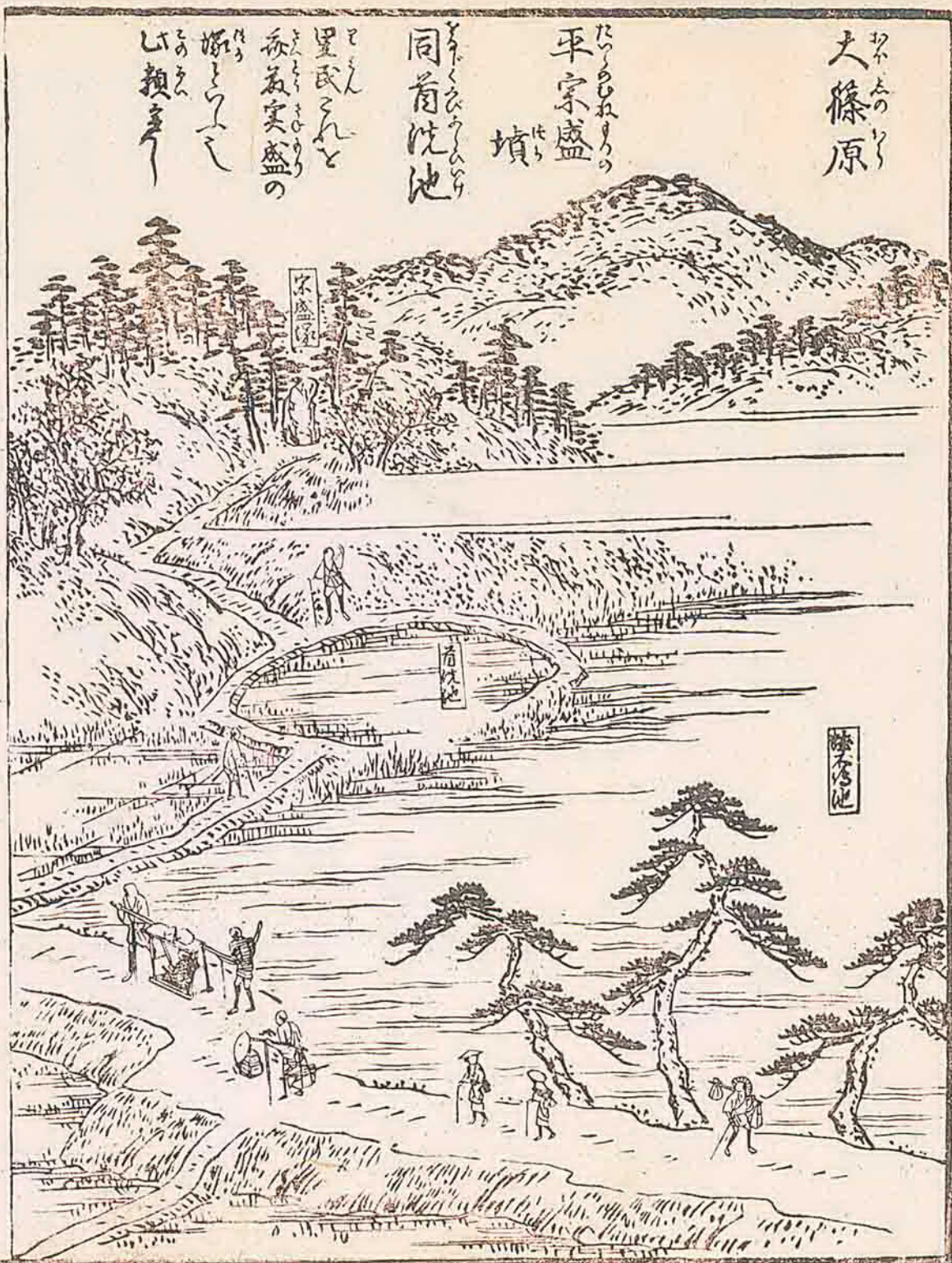
平宗盛

墳

同首洗池

里氏と云ふ

い預まう



金葉

新勅

新後推

後子職

日

風雅

新拾

新後拾

有林

光仍紀

月夜の光りて月を照らすを思ふに如きもの

大森の寺に風を吹かせるに如きもの

ふたつにわかれし月を思ふに如きもの

鏡山に雲を捲くを思ふに如きもの

つるのふたつにわかれし月を思ふに如きもの

岩をあげて思ふに如きもの

ふたつにわかれし月を思ふに如きもの

鏡山に雲を捲くを思ふに如きもの

つるのふたつにわかれし月を思ふに如きもの

岩をあげて思ふに如きもの

ふたつにわかれし月を思ふに如きもの

鏡山に雲を捲くを思ふに如きもの

なつとくを思ふに如きもの

鏡宿

牛若丸

長者

十蓮

馬淵

水

は

東

馬

淵

繩

子

なつとくを思ふに如きもの

鏡宿を思ふに如きもの

牛若丸を思ふに如きもの

長者を思ふに如きもの

十蓮を思ふに如きもの

馬淵を思ふに如きもの

水を思ふに如きもの

はを思ふに如きもの

東を思ふに如きもの

馬を思ふに如きもの

淵を思ふに如きもの

繩を思ふに如きもの

子を思ふに如きもの

武佐寺

いづるやうに北山隈に武佐寺あり

本尊千手観音上宮志子の持念佛あり寺あり雲心育

女尾石より又八尺餘の香木あり尚寺むく武川綱より

者これ所創に放り武佐寺より平家没落の所平重衡東

下それとんけ寺に魂ふ事源平盛衰記に見えり

愛知川中下武里半より西の方よりて八幡の町へ

仍道法五十町許あり

八幡

は色の於舎に地よりて高人多く産物と收帳地及び布機

豊表園を焼心薬蕪等あり

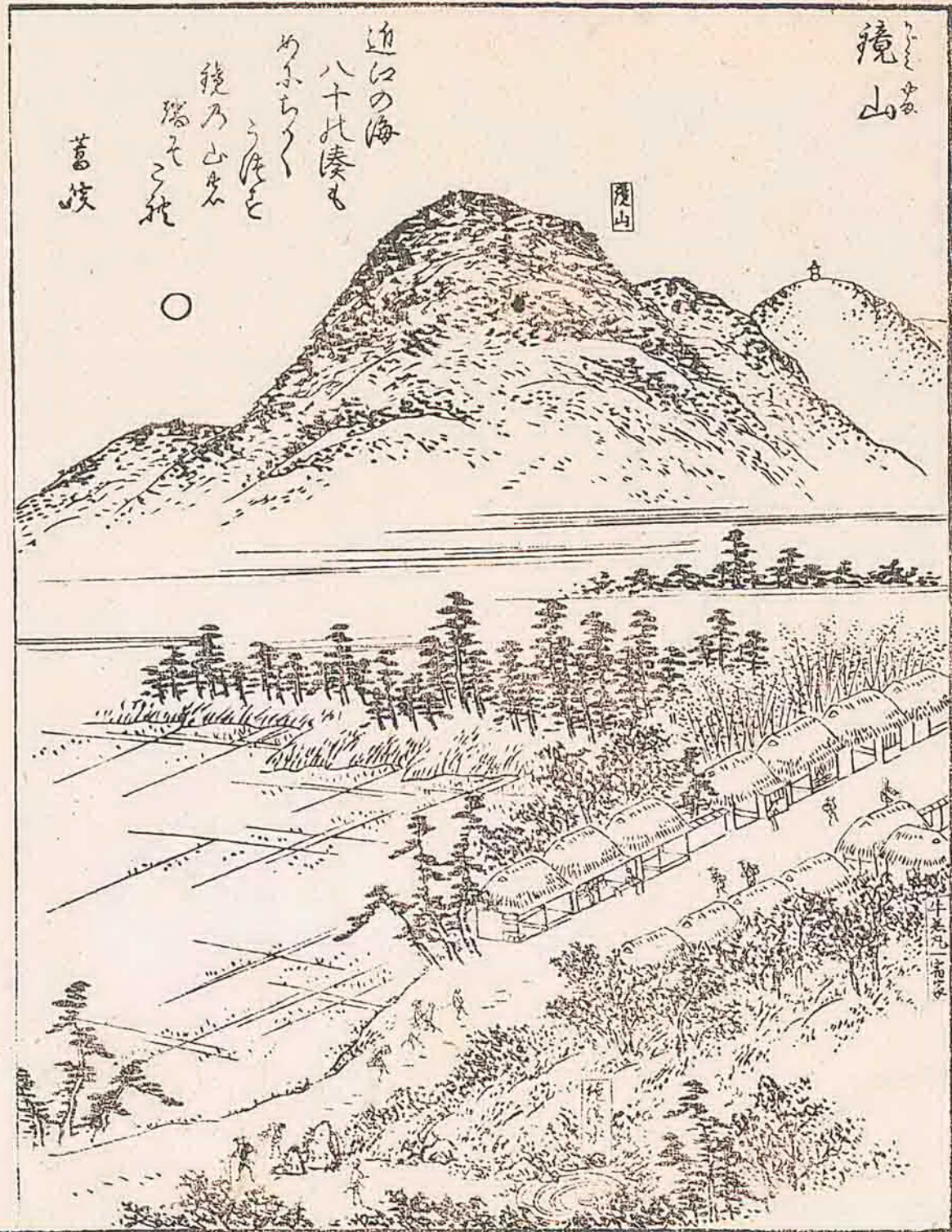
比牟禮社

神名帳に大嶋神社云々延喜式

本社中央應神天皇左神功皇后右

天照太神社本社あり稲荷社本社あり若宮

鏡山



近江の海

八十北湊も

ゆふらう

鏡乃山名

瑞々

葛城

大嶋社二前日新ふ神樂殿本社の方拜殿おあり
樓門社小向山の神の神よりて祭都祥々と
島居類基時卿の筆持明院大納言

其外末社多し一畧之

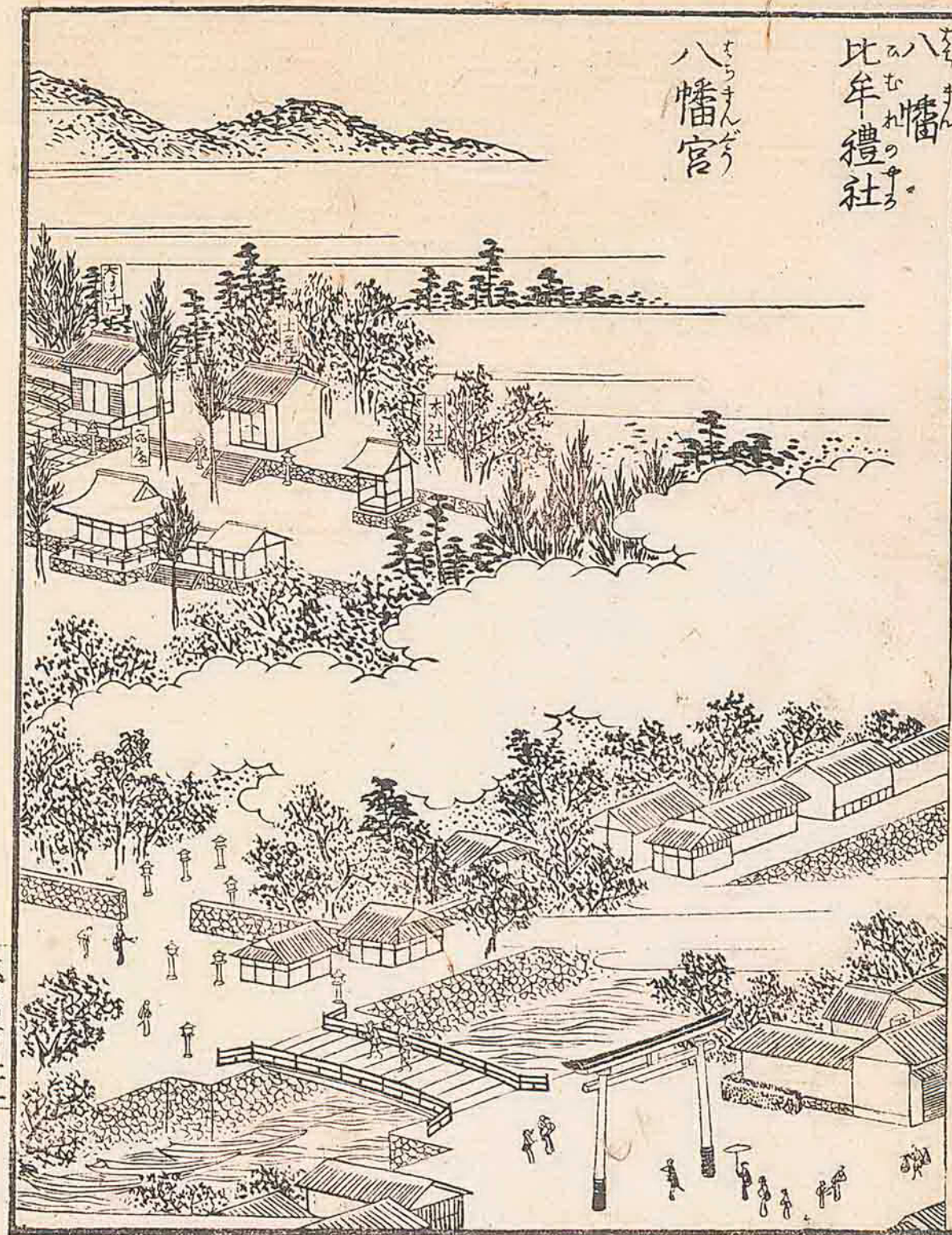
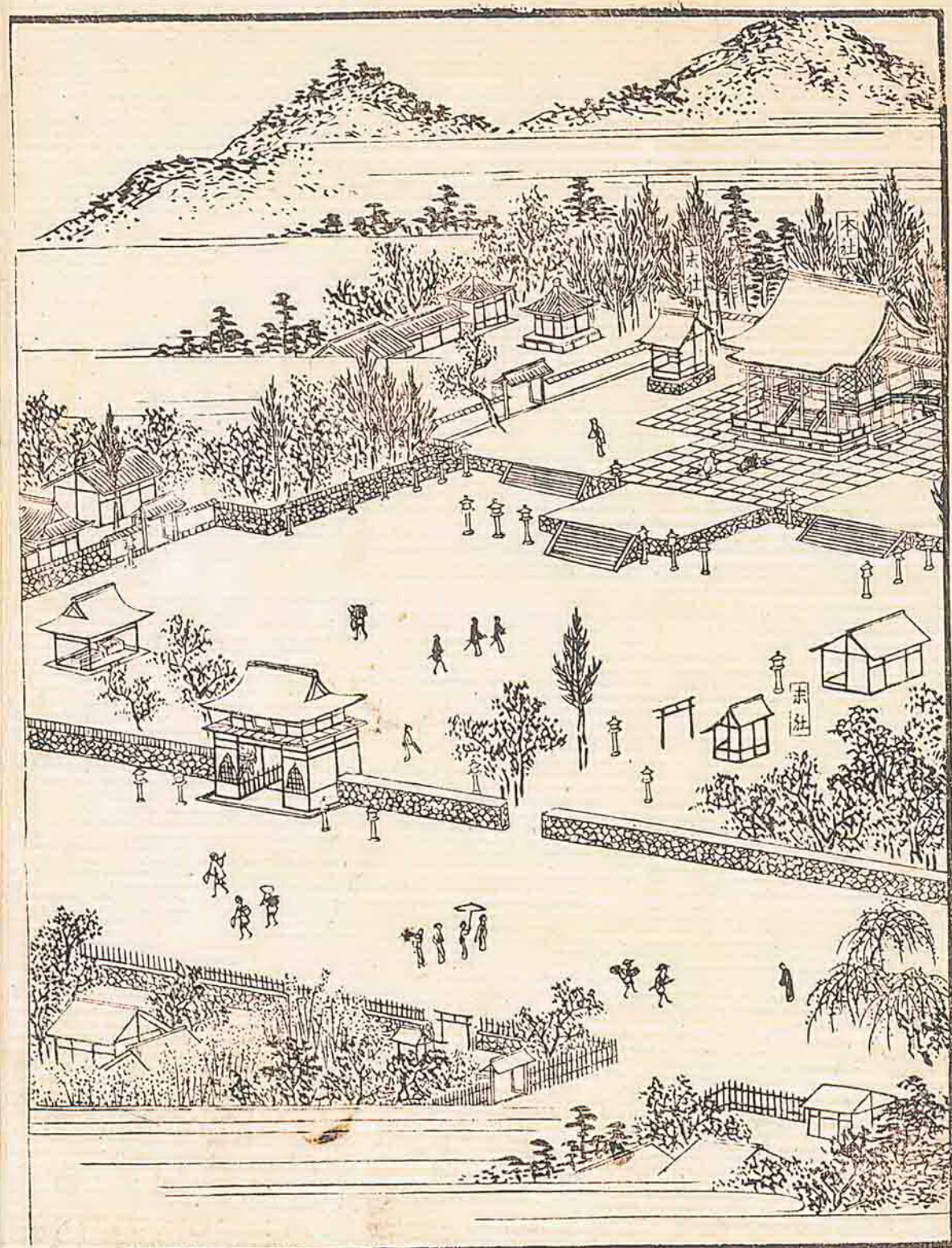
夫當社の鎮座と原ふ社傳云人皇十三代成務帝高元德
宮ふあゝ即位の時武内大臣小令ト此瀛津島易於多
大徳を神と祀じむ厥后神の告より八岐宮に殿を鎮
なれ天慶年中平将門追討の時六孫王經基公系統ありて
祈願とありふ直ふ賊敵亡びぬ周々ふふ移り大振八幡堂
稱八月十五日創祭を行ふゆゑに陽成院の時宇天卜早魁の
時徳雨を祈ふ速ふ靈應ありて毎歲三月十五日祭すそ
垢離の神事あり天曆のより依る本家は國より遷るより氏の神
と崇信し神領五百餘石を寄附し生土三十餘箇所と増え

神威光耀より長徳三年より放生會坂行り寛弘二年五月
藤に一社以勧修寺下の社と稱し弘安中より蒙古移り本
奉幣ある忽神風ふ追れ海よめて亡びぬと傳り早霜重なり
永祿十一年九月信長公の薨ふ迄に國作る本家十八箇所一
減り六神社もい時ちふ衰弊して終ふゆゑ其頃豊臣秀次
此ふ城を築けりが幾程おく文禄四年に亡び慶長五年に
平天下となりしより神殿を再興し齋觀ふふ其後寛永廿二
年因東の令にりて神領五十石神職の除地を賜ふ神徳と
りてむいふ小室より靈祐ありてあぐぞえなる

八幡山十景和歌序

小村孝吟法印

卯月の十日あり此山の八幡宮乃神ワにさうぞゆりて
りけさけらゆり里ふハワとや万々本社の志新をせえさ
はさ形まば鐘きさうふ尾上よの月りのみづうとめさ



八幡宮
やうはんぐう

比年禮社
ひねんれいしゃ

人々を悦ばせしむるは妻をばつるありのまじき事
 も見ゆあふれす夕日れ教ふまゝ此のまじき事なる
 鴻はこれあふれきなりそのあまに今ひいらたぬと云
 ぬを教ふひつる乃中れきむきにゆくあはれ面をこそ花田
 なるづれの森に深きと申す人なり海士の法を
 するもよくこれ教ふすむひはすづねあふれけの可計
 あやひくつひにきくむにきくむに親き寺夜きふ
 づり三十三のひとくはあふれきむきにゆくあはれ面をこそ花田
 安土の山ありそむきなる惣見寺こそ故信長の地と遠き
 山下清とけうけせたるあふれきむきにゆくあはれ面をこそ花田
 のとれるとく見せあふれきむきにゆくあはれ面をこそ花田
 山おびえそむきの山おびえそむきの山おびえそむきの山
 乃ハの美系にふくむかたにふくむかたにふくむかたにふくむ

見る人々を悦ばせしむるは妻をばつるありのまじき事
 桑井れあるあるあるあるあるあるあるあるあるあるある
 ぬみふなりそむきの山おびえそむきの山おびえそむきの山
 ぬはよみふなりそむきの山おびえそむきの山おびえそむきの山
 ちどふなりそむきの山おびえそむきの山おびえそむきの山

ちどふなりそむきの山おびえそむきの山おびえそむきの山
 ちどふなりそむきの山おびえそむきの山おびえそむきの山

十葉のうち八葉晩鐘

長命寺

長命寺山中庄の上ふあり八幡より五十町并

奉尊聖親音

八幡の南の山をひかり葵の

水笠岡

古今

水笠れ雲の中ふ姉とわれとての物なる雲はつるも

あふれの雲乃葛をききて今新うあふれけのまじき事

後後撰

新後撰

玉系

日

後後撰

新千載

日

日

新後撰

日

新後撰

日

後後撰

日

水茎の思れ清茅の蓋を乃婦なりや教をうらん

あふれの思乃志蓋とあぬれむ里の志と杜風と吹

りうれの思く形よりあふれの思乃首をふとあけふわ

いふれをふてふてぬ水茎乃思由のあふれをほく後

はふれを人よとせやあふれより乃蓋をれれをを

伐の思れれを思せ水茎の思れ清茅の秋の思れ

水茎の思れれ藤の一ゆりてふのよにぬれ云の思ふも

あふれの思乃蓋を乃秋をを思む人いりて思ぬ教を

水茎の思乃小田乃乃ふ思くれをて早苗とあふり

幾ふれを思て思やあふれの思れ蓋をふひく思に

あふれの思思も思やうと尾乃思れを思て思る将人

思くあふれや思く人水茎の思れやうの思れよの月

水茎の思乃思乃思て思て思れ思の思思の思うせ

水茎院

定家

人丸

思家

思家

思家

思家

思家

思家

思家

思家

思家

思家

本巻下冊四

